

入山章栄著『世界の経営学者はいま何を考えているのか
—知られざるビジネスの知のフロンティア』英治出版（2012年）

「ドラッカーなんて誰も読まない!?!」。これは、本書の帯に書かれた文言である。日本では数年前、ピーター・ドラッカーの『マネジメント』をもとにした『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』（通称、もしドラ）がヒットした。もしドラのヒットと同じころ、ドラッカーに関する書籍も書店を賑わせた。もしドラをきっかけに、ドラッカーを知った人も多いだろう。また、ドラッカーが経営学の主流派と考える人も多いだろう。ところが、アメリカのビジネススクールで研究する著者によれば、日本のドラッカー・ブームと裏腹に、経営学の本場アメリカでは、ドラッカーの考え方は用いられていないという（現在、著者は早稲田大学ビジネススクール准教授）。ドラッカーの考え方が用いられていないのであれば、世界の経営学者はどのような研究をしているのだろうか。このことについて、分かりやすく解説しているのが本書である。専門的な内容でありながらも、分かりやすく丁寧にエッセイ風で書かれているため、気楽に読むことができる。なお、タイトルで『世界』と表現しているが、本書の大部分はアメリカを中心とした内容である。

本書は三部から構成されている。Part 1では、日本の経営学とアメリカの経営学の違いについて述べられている。Part 2では、アメリカの経営学における最新の戦略論や組織論について述べられている。Part 3では、Part 1およびPart 2の内容を踏まえながら、経営学の課題と発展性について言及している。本書を読み進めると、日本人がイメージする経営学とアメリカ人がイメージする経営学の違いやアメリカの経営学の最新理論が見えてくる。例えば、先述したドラッカーだけでなく、日本で著名なマイケル・ポーターの『競争戦略論』も通用しないことが指摘されている。そして、ウォルター・フェリアー、ケン・スミス、カーティス・グリムなどによる研究が紹介されている。確かに、アメリカは経営学の本場であり、そこでの考え方は経営学の標準化、つまりグローバル・スタンダードと捉えることができるかもしれない。しかし著者が指摘するように、ある意味において、日本の経営学は独自の進化と発展を遂げてきたという見方もできるだろう。例えば、本書では、アメリカは統計データに基づいた定量的な研究が一般的であるのに対して、日本ではケース・スタディを中心とした定性的な研究が一般的であると紹介されている。著者は、それぞれ長所と短所があるとした上で、日本の経営学者が事例を丹念に調査してきた功績は大きいと評価している。

もしドラなどドラッカー関連の本を読んだ人や日本の大学／大学院で経営学の授業を学んだ人にとって、本書の内容は衝撃的かもしれない。しかし本書を読めば、世界から見た日本の経営学の姿が客観的に見えてくるだろう。また、日本の経営学が独自の発展を遂げていることを踏まえれば、そこには日本企業の発展形成過程との関係があることも見えてくるだろう。そして何より、アメリカとは異なる日本の哲学的思想が背景にあることを見ることができるであろう。本書をもとに、日本の経営学、経営戦略、企業組織、人材育成、労使関係を再考してみてもはどうだろうか。

（唐澤 克樹）